

集

イワクラサミット in 宮崎

研究発表論文（一）

（2005年イワクラサミット in 宮崎での研究発表論文を2回に分けて特集します）

イワクラサミット in 宮崎 発表論文

霧島周辺の巨石遺構

NPO 法人宮崎文化本舗 谷口 実智代

はじめに

宮崎県内には、あまり知られていないがイワクラ（磐座）が存在する。古くは大正から昭和にかけて、考古学者の鳥居龍藏博士が調査しまとめられた「上代の日向延岡」に、現在は開発され、二度と目にすることの出来ない貴重なイワクラの写真を見ることが出来る。また、最近では平成15年に日向市の大御神社境内の拡張工事の際に巨大な「さざれ石」が発見され、現在「神座」として祭られている。

このような県内の巨石信仰を語る際に重要な位置をしめているのが「霧島山」だ。宮崎県および鹿児島県にまたがる霧島火山帯は六つの火口を持つ火山の集合地帯である。古来信仰の対象とされ、親しまれてきたこの霧島の周辺には巨石を奉る神社や謎の巨石群、また景勝地となっている巨岩などが存在する。これらは霧島を対象とした巨石信仰ではないだろうか。

この地は、歴史上「熊襲族」「隼人族」と呼ばれ、まつろわぬ民とされた南九州の先住民が暮らした土地もある。この巨石を地上に置き、霧島を囲む神域を形成したのは、それの人々だったのだろうか。だとすると彼らの世界観はどういうなものであったのか。県北と県南とではイワクラの形態や大きさに微妙な差があり、海沿いと山中でも違いが見られる。ここでは県南の、特に霧島山周辺に注目し、えびの市矢岳高原巨石群と東霧島の都城盆地に発見した北斗七星型に並ぶイワクラを祀る神社についての考察を述べたい。

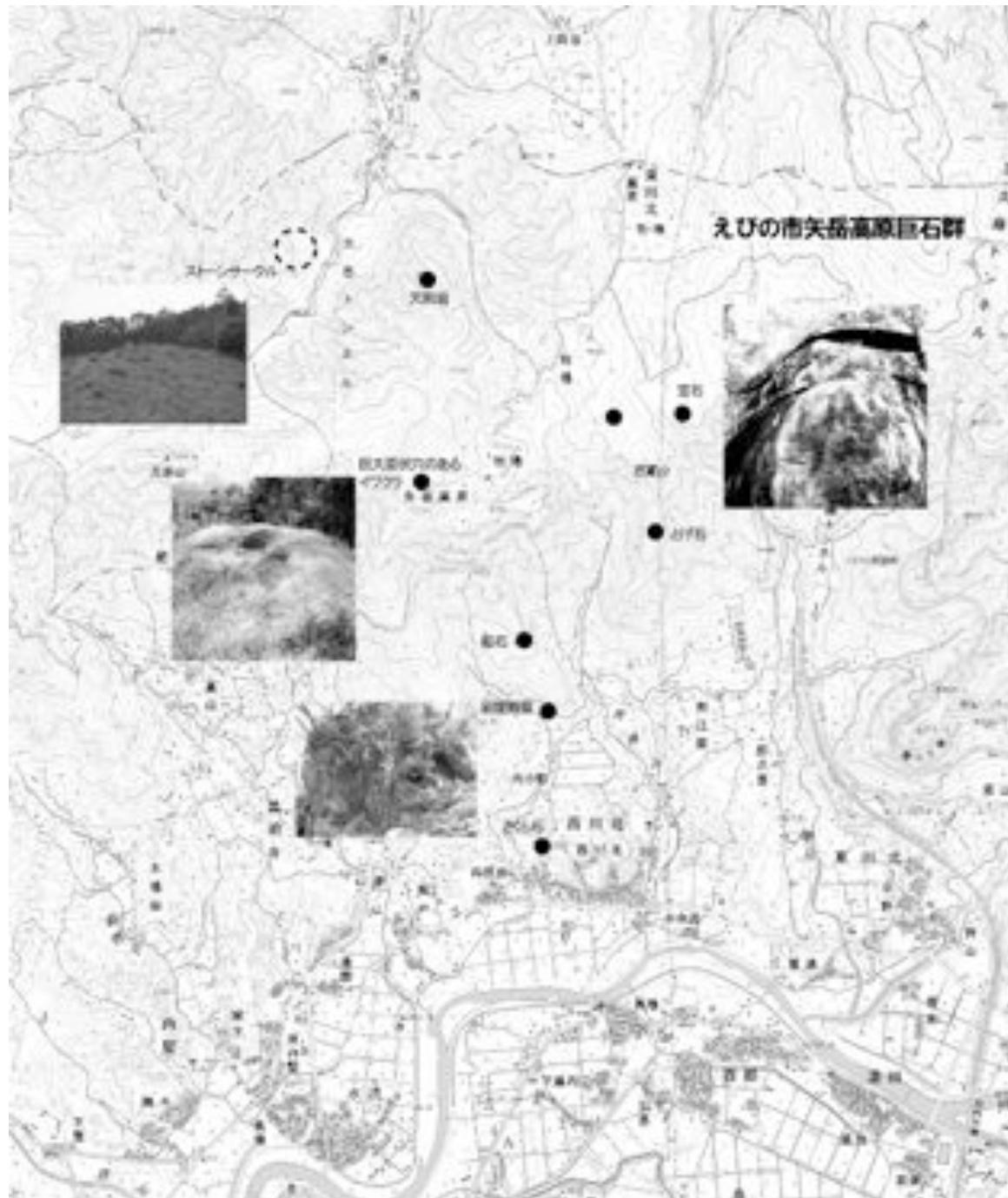
第一章 えびの市の巨石信仰

宮崎県西部に位置するえびの市は、熊本県、鹿児島県、そして宮崎県の三県の眞境に位置する。古来より交通の要所であり、また「隼人・熊襲」と呼ばれる人々が暮らした土地もある。北は加久藤力

ルデラの北壁・矢岳高原、南には高千穂の峰や韓国岳など六つの火口を持つ火山帶・霧島山に挟まれ、川内川が東西に流れる。この川を下れば直接海に出られる。また、尾根伝いに九州山脈を移動する山道にも通じる昔からの交通の要所であった。またこの地域には社殿を持たず、巨石を祭る天宮神社もあり、市内を歩くといふとところに「田の神さあ」と呼ばれる石仏も多い。「氏神」と呼ばれるこぶし大の丸石を祭る家も多い。つまり、石を祭る風習が残された地域だと見ることが出来る。

(二) 矢岳高原周辺の巨石

えびの市の市の中でも特にまとまって巨石が見られる場所が、熊本県との県境にある矢岳高原付近である。今でもこの付近は隣県熊本県の球磨川沿いとの行き来のための主要道路が通っている。尾根伝いに球磨川に抜ける山道を歩いて利



神主が祝詞を

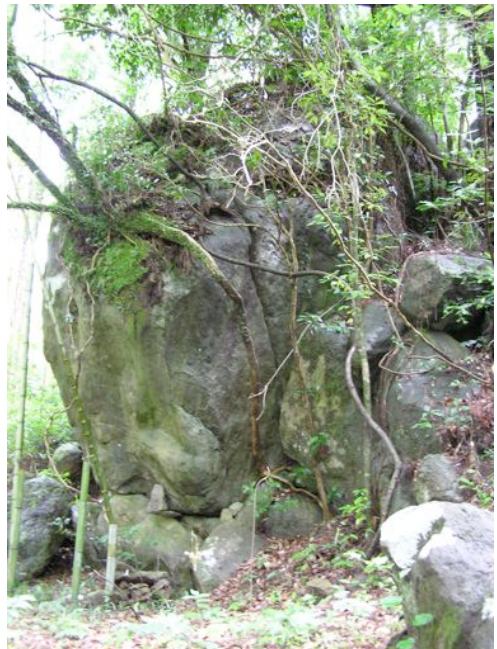
あげたそうだ。

えびの市西川
北地区の菅原
神社に雨乞い

の祝詞を記し

た文書が残さ

れている。



えびの市西川北地区・岩屋観音

用したのを覚えている方もおり、

このような古来からいくつも存在

している尾根伝いの道沿いに、巨

石の報告例が多いといえるだろう。

観音という、複数の巨石で組まれ、

馬頭観音が奉られているイワクラ

などは、現在も信仰が伝えられる

巨石として注目に値する。この岩

屋権現は、「岩屋」と呼ばれている

が洞窟ではないため、もともとは

「岩権現」と呼ばれていたのでは

ないかと思われるそうだ。岩屋権

現は今は使われていない徒步での

登山道の入り口にあり、自分と薪

拾いに連れて行く馬の無事を祈つ

てから山に入ったという。今でも

春に馬頭観音のお祭りが行われて

いる。

また矢岳高原の一画をなす百貫山の頂上付近には「笠石」と呼ばれ、人工的ではないかと思われる石組みがある。杉植林のため原生林が伐採される以前は、深い森の中の道標的な巨石として親しまれ、信仰されていたようだ。この石は、二段に重ねられた二組の巨石が直角をなすように並べられたもので、表面には「星の配置を記したのだろう」と言われている直径

一~二センチの盃状穴も確認できる。かなり薄くなっているが、文字が彫られた形跡も認められる。

これらの巨石は、麓の集落から頂上の矢岳高原に向かう尾根伝いの道でつながっている。この他の尾根筋にも同様の巨石がいくつか存在するようである。名前の伝わるもの、言伝えのみ伝わっていて現在は実在のものもある。矢岳高原の頂上付近は昭和三十年代に牧



えびの市矢岳高原・笠石

場として開拓され、農業施設や茶畠などが広がっているが、その所々に動かせなかつた巨石が残されている。詳しい位置関係はまだ未確認だが、それらの巨石群は尾根伝いの道を表し、一様に矢岳高原の頂上付近を中心になる石造施設があつた可能性すら感じさせるのだ。ま

た、これらの巨石遺構は、地元えびの市の有志の方々で組織された「矢岳高原古代祭場保存会」（会長・源島啓俊氏）の皆さんによつて、保存活動がなされている。しかし間近にまで農地開発や鉄塔建設の工事が及んでおり、一刻も早い文化財指定と公的な調査保存が望まれる。

(二) 矢岳高原ベルトンオートキャンプ場の巨石群

地元の言伝えの中に登場しない巨石にも注目したい。イワクラである可能性がもつとも高い巨石として、ベルトンオートキャンプ場への登り道から見える崖にある巨石群と、同じくベルトンオートキャンプ場内にあるパラグライダーの発信基地の斜面の巨石群が上げられるだろう。加久藤火山の爆発によって出来た加久藤カルデラの北壁をなす矢岳高原には岩場が多い。がしかし、高く生い茂る熊笹

をかき分けるように姿をあらわす巨石群には、人の意思で整形されたものではないかと予感させられるものも少なくない。イワクラ（磐座）である可能性を秘めた石ではないだろうか。

ベルトンオートキャンプ場内のパラグライダー発信基地は植林もされず、大掛かりな公園整備もされていないので、最も往古の姿を残している場所と言えるだろう。事実、麓の西川北地区の方に話をうかがったところ、この周辺は



パラグライダー発信基地の巨石群

在パラグライダーの発信基地までは、キャンプ場の展望台から徒歩ルートと乗用車で登るルートがあり、その徒步ルートの途中に巨石群がひとつある。一边が二メートルほどの巨石が六つほど、明確に円形を成しているとはいひ難いが一群をなしており、その最も北側に位置する鋭角な三角錐形の石は、天に向かつて起立している。また南側に位置する橢円形で横になった石には、白く「吉田（温泉マーク）」と書かれているのが読み取れることから、この石群は以前から知られていたか、近年になって集められた可能性も考えられる。ちなみに「吉田温泉」は登山道路の麓の温泉で、一五七七年から続く歴史を持っている。どちらにせよ、周囲にこのような巨石の散乱があまり

見られないことから、まったくの自然の地形というよりも、寄せ集めたり、持つたり何らかの人の手が加わっているものと思われる。

もうひとつ、パラグライダー発信基地の斜面内に階段状に三段連なる巨石群が見られる。こちらは斜面の土に半ば埋もれており、露出した部分だけでも三メートルを越える石もある。一番上の巨石はほとんど埋もれているが、二番目、三番目の巨石は充分に見ごたえが



三角形の盆状穴

ある。中央の巨石は、地上に露出している部分が一番大きく、箱型の形状で、頭頂部の盆状穴が圧巻である。底辺が四十センチほどの三角形の形をした盆状穴が二つ連なっている。この三角形の盆状穴は、天草地方でよく見られると報告されているものと同様ではないかと思われる。また、この盆状穴には排水のためと見られる溝も彫られている。この溝は三角形の頂



巨大な盆状穴を持つイワクラ

の三段の巨石群の中では中心をなす巨石であると考えられる。そして、斜面では一番下の段になる巨石だが斜面の下の方から見上げると、石の先端が丸みを帶び、その中央には縦に溝が彫られていていることから陽石を表しているようにも見られる。また頭頂部には長径が約三十センチにおよぶ橢円形の盆状穴があり、水位を調節するためと思われる溝が見られる。またその橢円は、霧島連山の中でも北西に位置しきれいな円錐形の山容を見せる特徴的だ。この大きな盆状穴の

点から伸び、中でも一番大きなものは直径五センチほどの筒状のもので、まるで半分に割った竹を雨どいのようにはめ込んで、一番下の巨石に水を流すような仕掛けが施してあつたかと思われるような形状をしている。この他にも柱状の何かを立てていたと思われる円筒形にあいた穴もある。これらの加工痕や石自体の大きさから、こ

の巨石群を境に西側の斜面には杉の植林が広がっているが、この杉林の中にも階段状に配されたと思われる石の配置が見られる。それらの石をたどって頂上を目指すが出来ることも付け加えておきたい。

この巨石群を境に西側の斜面には杉の植林が広がっているが、この杉林の中にも階段状に配されたと思われる石の配置が見られる。

すと、そこには高さ一メートル弱の米粒状の立石がある。この石にはうつすらと漢字が掘り込まれているのが見て取れ、明らかに人の手が加わっていることが解る。盆地のある巨石群および杉林の中の階段状の石の並びと、この石碑のような立石に関係性があるとは言い切れないが、人の流れが存在していた証拠にはなるのではないだろうか。えびの市内に多く存在する「田の神さあ」と呼ばれる石仏は、田の方角に関係なく霧島山に向けて建てるのだそうだ。石にこめた霧島への祈りを現代に伝え



漢字が彫られた石

ているのだろう。

(三) 矢岳高原と霧島連山の位置関係

最初に述べたとおり、矢岳高原は加久藤カルデラの北壁をなしている。その加久藤カルデラの南壁は、実は霧島連山に覆われている。現在植林された木々の成長の様子が、実際確認が取れなくなっているが、矢岳高原の巨石群はこの霧島連山がきれいに見える位置に配されていると予測される。特に、矢岳高原ベルトンオートキャンプ場の巨石群は、パラグライダーの発信基地の巨石群に限らず、展望台付近の巨石からも見事な霧島山の姿が見られる。そしてそれぞれ正面にあたる山に向かつて向きを合わせたり、溝が彫られたりなど何かの細工が施してあることから、霧島山に対する巨石を利用した祭祀遺跡である可能性が高いと

思われる。または古来から人がこの地に住んでいた可能性も否定できない。考古学的な調査の必要性を感じるのだが、えびの市および宮崎県からは遺跡の存在は報告されていない。これまで報告してきた巨石群およびその周辺に学術調査が入ったという記録もないが、

イワクラサミツ終了後、一般的の参加者から平成十六年八月に発行された「南九州縄文通信」十五号

の中で藤木聰氏の「縄文時代の矢岳越え」という論文があることを教えていただいた。この中で、矢岳高原周辺から縄文草期から早期にかけての石器や集石遺構などの遺物散布を発見したことが報告されている。氏がこれらの遺物散布地を発見したこととなつたきっかけは、矢岳高原周辺に未周知の黒曜石産地を発見するためであつた

第二章 東霧島の北斗七星

次に、霧島山の東側、主に都城盆地に横たわる北斗七星の形に並んだイワクラを持つ神社について教えていただいた。この中で、矢岳高原周辺から縄文草期から早期にかけての石器や集石遺構などの遺物散布を発見したことが報告されている。氏がこれらの遺物散布地を発見したこととなつたきっかけは、矢岳高原周辺に未周知の黒曜石産地を発見するためであつた

という。以前から矢岳高原の熊本・人吉側には黒曜石の産地があると報告されている。隣接するえびの市側の矢岳高原にも黒曜石を産出する地域があつた可能性が考

えられるそうだ。この黒曜石を求めて、縄文時代草期から矢岳越えのルートが発達し、現在まで引き継がれ、その道筋に霧島山に対する信仰の巨石が残されていると考えるのは冒険だろうか。

(一) 北斗七星発見までの経緯

た所を地図に記していく。特に研究というほどのことではなく、ゆくゆくは巨石マップのようなものが作りたくて続けていた作業だが、その中で、霧島山の南東に位置する都城市とその周辺にある巨石の並びが北斗七星の柄の部分に見えた。図で示されている⑤、⑥、⑦の位置である。奈良県の山添村・神野山で天体図のとおりに並ぶイワクラの存在を以前から知つていただけに「もしかして」と思い、地図と天体図をパソコンに取り込み、縮尺と方位を合わせて重ねてみたところ、三ヶ所の巨石と三つの星の並びが見事に合致した。その三ヶ所の巨石はそれぞれ神社に奉られている。まさかと思い、残りの星の位置も確認したところ、それぞれの星に対応する神社が浮かび上がってきた。それらは宮崎県内でも有名な神社であり、そこに石が奉られていることも良く知られている。では、どのような神社で北斗七星が形作られているのか、詳しく見ていきたいと思う。

(二) イワクラ（磐座）を

もつ神社

①高原町 皇子原神社

神武天皇の生誕の地と伝えられる皇子原は、ふもとに高原町を一望できる小高い丘である。現在ここは皇子原公園が整備され、宮崎県民のいこいの場所として親しまれている。この皇子原公園の一角に、神武天皇を奉る皇子原神社はある。この皇子原神社は古墳の上に建っている。この古墳も合わせて周囲には合わせて六つの古墳があり、高原町教育委員会では皇子原古墳群としている。大正十五年のトロッコ道路工事の際に土器が出土したと伝えられる。現状保存のために発掘は行っていないらしいが、五世紀から六世紀ころの地下式横穴墓ではないかと説明されている。



この皇子原神社の参道脇には、神武天皇が狹野尊と呼ばれていたころに腰掛けでクニを見下ろしていたと伝えられる腰掛石、社殿の後ろには生まれるときに産湯に使つたといわれる産湯石がある。



皇子原神社・産湯石（または産石）



霞神社のイワクラ

広い畠地帯に屹立する霞ヶ丘に鎮座する。創立は不明であるが、境内には文化十二年（一八一五年）

②高原町 霞神社

の年号が刻まれた石灯籠が数基存在する。大己貴命、志那津彦命、少彦名命、大山祇命、保食命、猿田彦命を奉る。古くから農畜産業、開運の神さまとして親しまれている神社である。もとは霞権現と称し、性空上人により創始された霧島六所権現のひとつである。社殿後ろには岩巖があり、その隙間に神の使いである白蛇が住むといわれ、奥の院を設けてお奉りしている。

「霞」とは修驗道の縄張りを意する言葉であることから、かつて六

所権化参りの前に修驗者たちが白蛇様の生息する山頂磐座を依代にして、修行の無事と世の安泰を祈願したのだそうだ。天保年間に刊行された「三国名勝図会」には、祠廟を設けず山頂磐座を奉る様子が描かれている。境内には馬頭観音も奉られている。

③高崎町 東霧島(つまきりしま)神社

創立は孝昭天皇のころと伝えられ、「延喜式」の中にも登場する。霧島六所権現のひとつである。祭神は伊弉諾尊。霧島山の東に連なる長尾山脈の突端にある。ご神宝は「十握の剣」など。この神社は最も「石」にまつわる神社と言えるかもしれない。一夜にして鬼が積んだといわれる役百七十段の自然石の階段。この階段の麓には、見事な切り口を見せる割裂岩または魔石と呼ばれる二メートルを越す大きさの石が奉られている。この割裂石は伊耶那美尊の死に伊弉



東霧島神社・がらん石

諾尊腹が腹を立て、十握の剣で二段に切り刻まれた火之迦具土命であるとされ、そのうちのひとつが現在の宮崎市大島町（延喜式に記載されている江田神社の近く）に飛び去ったという言い伝えがあり、方や大島町の矢的原神社にも「東霧島神社から飛んできた」といわれる石が奉られている。この石の後方には池との境に立石が設けられており、陰陽を表しているのではないかということだ。また自然石の階段を上った頂上に、社殿にはないかといふことだ。また自然石の階段を上った頂上に、社殿に

守られるよう鎮座しているのが奉斎山岳信仰の祈りの宮として奉られた「がらん石」と呼ばれるご神体の石がある。これは数個の一メートルから二メートル台の石で組まれた霧島山に祈りをささげる祭壇ではないかと思われる。

④山田町

まず地図上で神社と星が重なることを確認したのが始まりだが、この④の位置だけ地図上にそれらしい神社がなかった。がしかし、何があるかもしれないのにかく星の位置の場所に車を走らせたところ、田畠のなかにぽつかりと半球状の小山が浮かんでいた。国土地理院の二万五千分の一の地図で確認したところ、確かに周囲の山筋とは切り離された平地に、緩やかな等高線で表された三角錐の小山が表現されている。登山道もなく、民家の裏山であつたため登つて頂上を確認できなかつた。また麓には神社ではないがお堂があ

り、この辺一帯が古戦場であつた旨が記されていた。今後この山の頂上にイワクラが確認されれば、北斗七星が完成する。



山田町の小山

⑤都城市 母智丘（もちおか）神社

都城盆地を見下ろす小高い丘の上にある。創建は明らかではないが、往時より「石峯稻荷」として

地元で厚く信仰されてきた。母智丘または持尾はこの地域の地名であり、頂上に巨大な岩石が多数累列しているために石牟礼または石峯と呼ばれたらしい。神社の社殿後方にある巨石の隙間に狐がすんでいると伝えられ、稻荷が祭られた。母智丘神社の建立は文政年間から文久年間（一八一八～一八六三）と伝え、主祭神は豊宇氣姫神、大年神である。石峯稻荷の建立はそれより古い。さすがに「石峯」の名に恥じない巨石が群れを成している。周囲十メートル超える巨石も複数存在している。屹立する三角錐の巨石は「陽石」と呼ばれ、また横に二枚並べたような巨大な鏡餅のような「陰石」「稻荷石」は、まだ土に埋もれたままの部分もあり、全体の形を把握することはできない。下を覗き込むと隙間があつて、土の中から突き出た石の上に乗つているように見える。もし、全部を掘り起こしてみたら、石室の下に六千三百年前の喜界カルデラを作つた海底火山の噴火で飛んできた「アカホヤ土」に覆われ、これらの地層の下に巨石は半ば埋もれているものもある。もし、この巨石の石組みが人為的に組まれたものだとしたら、その起源の古



都城・母智丘神社の陰石

さがうかがわれる。頂上の展望台建設時に弥生から平安時代にかけての土器や土師器が出土し、一九八九年に都城市教育委員会が調査している。明治二三年頃の神社社殿建設時にも古陶器が発見されたと報じられている。

⑥財部町 高之峰

この山にはとにかく巨石が多く転がっている。現在頂上は公園として整備され、中腹にはゴルフ場が広がっているが、ここ駐車場には二～三メートル大の巨石で石垣が築かれ、飾りの巨石などが配されている。どれも頂上付近に残る巨石と石質が同じであるようなので、もともと多く存在していた石がゴルフ場建設時に集められ、それを利用して石垣が作られたものと思われる。この高之峰には二つの神社がある。山の頂上にある高之峰神社は祭神、創建とともに不明。社殿は平成五年に建てかえられて新しい。人頭大の石が積まれ



財部町高之峰金峰神社

たイワクラが奉られている。もうひとつは頂上から少し下ったところにある金峰神社だ。高さ二メートル弱の球形の石が奉られている。この石は中央から縦に真二つに割れている。ここは古くは蛇王権現と呼ばれたことが、明暦元年（一六五五年）の「日光神並末社改帳」に記載されている。それによると

本地は愛染明王であるそうだ。ふもとの帝釈池の大蛇が子供を飲み込み、その大蛇が尾で石を叩き割り、その隙間に逃げ込んだという

⑦末吉町 住吉神社

姥ヶ岳または住吉山と呼ばれる畠の中にぽつんとある小山の中腹にある。創建は不明。慶長五年（一六〇〇年）に島津義久が住吉神社に祈願した記録が残っている。祭神は底筒男命、中筒男命、表筒男命。鹿児島県末吉町でも由緒ある神社であり、十一月二三日に行われる流鏑馬が有名である。この山の頂上に姥ヶ石と呼ばれる石がある。この石は日隅（日向と大隈）の壠石、または高貴な人の山稜といわれている。「末吉町郷土史」に、「この姥ヶ石は二つあって、かまどの形にして一方は棹石があるが、他の方はそれがない」とある。立石自体は大きなものではないが、

大蛇伝説が由来となっている。また、この二つの神社は、実際の北斗七星の六番目の星とその横にある、陰陽道で北斗七星の「補星」と言われている星を表していると考えられるのではないだろうか。



末吉町住吉神社の姥ヶ石

まるでブロックを敷き詰めたような平坦な石で円形のステージ状に造られた磐境は、言伝えのようににかの祭祀の跡と思われる。昭和五年三月に鳥居龍藏氏が調査に訪れ、試掘して現在の姿が露出した。その下方は地面をたたくと空洞音がするが、鳥居氏は掘らない方がよからうといつて発掘を中止したそうだ。その時鳥居氏は姥ヶ石を「立石（メンヒル）」と説明したが、後に調査に訪れた八幡一郎

氏は「ドルメンの一種であろう」と語つたそうだ。

(二) それぞれの共通点

さて、七つの神社をつなげた理由、それぞれの共通点であるが、まずそれが丘の上にあるということであろう。平地の中にある単独の丘であつたり、山脈の一部であつても平地からの展望が良い場所にある。そして、山頂部またはそれに近い中腹の部分にイワクラ（磐座）を持つことである。形や大きさはそれぞれであるが、現在手厚く信仰されている。そして、それぞれの場所から「霧島山」が見えることである。実際、植林された杉の木の成長により展望が悪くなっている所もあるが、霧島山を意識してイワクラを配されたことは明確である。これらから見える霧島山は、先に紹介したえびの市からの眺めとは違つて、天孫降臨の地とされる高千穂の峰

に集約される。中央に三角錐の主峰を持ち東西両脇に大きな火口を持つ。高千穂の峰の南に位置する母智丘、高之峰、住吉神社からは象形文字の「山」の文字のように三段の美しい姿が見えるだろう。

しかし、東側に位置する他の場所からは、さしづめエジプトのピラミッドのような形の整った三角錐の姿を目にすることができる。今でこそ小康状態を保つているが、有史以来何回も爆発を繰り返す活火山である。白い噴煙を吐き、時には火柱が上がつたことだろう。これらのイワクラおよび神社は、山岳祭祀の観点から高千穂の峰を拝する拝殿と見ることができるのではないか。

(四) 北極星はどこか？

さてそれでは北斗七星があるとすれば、当然、妙見である北極星もどこにあるはずだ。そこで同じ地図上で北極星の位置にある

場所を探した。結論を言うと神社はなかつた。ただし、神社ではないがそれに匹敵するものがそこにあつた。鹿児島県、山ヶ野金山である。当初さつま町側を永野金山、横川町側を山ヶ野金山と呼んで区別していたようだが、現在は総称して山ヶ野金山と呼ばれている。

その永野金山と呼ばれたさつま町側の永野という地名が残る山間部に北極星のしるしは輝いた。「山ヶ野金山誌」によるとこの永野金山は、島津久通が現在の鹿児島県宮之城町紫尾山の紫尾三所権現に寛永一八年（一六四一年）に黄金を与えてもらうよう祈願し、夢のお告げで永野の山の中腹に赤牛の寝姿に似た光を放つ石があると告げられ、そのとおりに光り輝く金鉱石を見つけたことが始まりであるという。もしこの金鉱石が実在していれば、真に北極星にふさわしい。また、このような由来があるとすれば、守護として紫尾三所権現が勧請されていたかもしれない。

(五) 北斗七星はどこから伝わったのか

北斗七星の形に神社が並ぶ例は他にもある。青森には「岩木山信仰」や「津軽の民間信仰」の中に、坂上田村麻呂建立の七社が北斗七星をなしているという記録がある。また、作家の加門七海氏が「平将門魔方陣」のなかで、江戸に描かれた平将門にまつわる北斗七星にならぶ神社を紹介している。ともに北斗七星を描くことで妙見の加護を得、その土地の守護としたという。道教、または陰陽道から発展した妙見信仰からこれらは作られた。これらの前例と霧島地方の北斗七星には神社としての共通点が見られないという点が上げられる。霞神社と東霧島神社は霧島六所権現で結ばれるが、それ以外をすべてつなぐ由来や共通点が見られない。このことは、もしこの北斗七星が意図的に配されたものだとすると、神社という形が用い

られる以前に形作られた可能性もあると考えられるのではないだろうか。この北斗七星の柄の先には、古来より良港として栄えた志布志湾がある。ここは揚子江あたりの中国南部と、直接海流に乗つて交流をしていたらしい。その志布志湾に程近い宮崎県串間市で、江戸時代に石棺より中国戦国時代の「穀壁」（徑三三・三センチ 東京・前田育徳会所蔵）が出土した。かなり昔から直接中国と交易をしていたと考えられるのではないだろうか。だとすればこのような交易品だけにとどまらず、大陸の文化がいち早く取り入れられていたとしてもおかしくないだろう。日本流にアレンジされる前の道教が直接入ってきた可能性も考えられる。そして進んだ技術も、北九州や畿内を経由せずに直接流入していたのではないだろうか。現在の地図と北斗七星の写真を重ね合わせて発見されたほどの精度、正確な地図と正確な天体図を書く技術があり、小高い丘の上にイワクラ

を据える土木技術を持ち合わせた技術者集団の姿が見えてくる。

（六）見つからない神社

最後に④に対応する神社が見つからない理由についてだが、これは「第五回イワクラサミント」宮崎の発表の際に、柳原事務局長から面白いご意見が寄せられた。奈良県山添村の神野山の天体を表すイワクラでも、北斗七星の④に対応するイワクラがなかなか見つからなかつたというのだ。このことから、宮崎と奈良のイワクラに共通する意図が感じられる。それでは④の星が秘されている理由は何なのか。柳原事務局長は、地上に描かれた北斗七星は夜明け間近の薄明かりの中で輝く姿であるという仮説を述べられた。④の星は七つの星の中でも一番暗い星である。夜明け間近の空では、その姿は薄く、肉眼では見えなくなると

ている瞬間、明るくなり始めた空にそれでもなお光を放つ力強い六つの北斗の姿が地上に描かれているのだ。この宮崎と奈良の共通点。奇しくも北斗七星を構成する神社のひとつ、皇子原神社は初代神武天皇が幼少のころに暮らしたと伝えられる土地だ。少なくともそのような伝説を生み出した下地がこの地方にはあるといえるだろう。そして奈良は、その神武天皇が新天地を目指してたどり着いたと伝えられている土地だ。宮崎と奈良の北斗七星は神武伝説を介して繋がる可能性を秘めている。

鹿児島県の大隈半島の方まで広がるダイダラボッチのような巨人の伝説は、足跡と言われる窪地があつたり、弥五郎どんが運んだ土や石でできた山があつたり、とにかくその大きさがしのばれる。この弥五郎どんは、隼人族の族長の姿だと言われ、弥五郎どんをかたどつた大きな張りぼての人形が浜下りする祭りが伝えられる神社（いずれも八幡神社）が三箇所ある。宮崎県北諸県郡山之口町円野神社、鹿児島県曾於郡大隅町岩川八幡神社、宮崎県日南市飫肥田ノ上八幡神社である。この三つの神社が形作る三角形は、先の志布志湾に傘を差したように広がつており、隼人族最後の族長が海の玄関口である志布志湾を守つているようにも見える。そして霧島山の東、都城

まとめ

以上、霧島山周辺の巨石遺構をいくつか紹介してきた。これ以外にも鹿児島神宮の高千穂宮跡にある石体神社や、もともとは高千穂の峰山頂に立てられたという霧島神

宮など、石にまつわる神社が多い。そしてそれらの神社や巨石の周辺に、「隼人族」と呼ばれた人々の姿が残されているのだ。たとえば、弥五郎どんと呼ばれる巨人の伝説である。霧島山周辺はもちろん、

盆地に横たわる北斗七星は剣先星とも言われる七番目の星、陰陽道で破軍星と名づけられた柄の切つ

先が、この弥五郎どんの三角形に銳く突き刺さる。この図形に、霧島山を中心として栄え、そして滅

んでいった隼人族の歴史が垣間見えたような気がする。火を噴く美しい霧島山と、同じく火を噴き、

いにしえの姫の名で呼ばれる桜島にはさまれた岩山を終焉の地とした隼人族の、激しい最後を思わずにはいられない。いや、隼人族を持ち出すまでもない。今もこの地に暮らす人々の願いが、地上の星の形に表れているような気がする。

火を噴く神の山・霧島山を恐れ、それでも離れがたく、石で築いた星のもとに身を寄せ、その怒りが鎮まるのをひたすら祈る。この山々がどれだけ敬まれ、そして愛されてきたか。えびの市の矢岳の巨石はもちろんのこと、さつま町の金山がおそらく北極星だとしても、都城盆地の北斗七星は、霧島

山を抜きにしてはありえない。火の民の歴史が、ここにある。

(了)

【参考資料】

「さつま山伏」森田清美
(春苑出版)

「上代の日向延岡」鳥居龍藏(鳥居龍藏研究所)

「熊襲・隼人の原像」北郷泰道(吉川弘文館)

「宮崎県史」宮崎県

「ふるさとの民話」えびの版」宮崎県えびの市

「みやざきの神話と伝承」101」宮崎日日新聞社

「イワクラの石の声を聞け」イワクラ(磐座)学

会

「南九州縄文通信」十五号(平成十六年八月発行)

「縄文時代の矢岳越え」藤木聰
「えびの市史」宮崎県えびの市

「宮崎県神社誌」宮崎県神社庁

「日向の国 諸県の伝説」瀬戸山計佐儀

都城市文化財調査報告書

第九集「母智丘第一遺跡」
「陰陽道の本」学研

「さつま山伏」森田清美
(春苑出版)
「財部町郷土史」鹿児島県財部町(現在 鹿児島県曾於市)
「末吉町郷土史」鹿児島県末吉町(現在 鹿児島県曾於市)
「平将門魔方陣」加門七海(河出書房新社)